

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI

とさぶし

TAKE FREE

No
55



**SUPER
LOCAL**
高知家

日常を載せて
ゆっくり、いっと



高知ならやっぱり!

軽トラやないと!



高知ならやっぱり!

軽トラやないと!

高知では当たり前の風景として日常に溶け込んでいる軽トラに目を向けてみると、
見えてきたのは、コンパクトでタフで便利なクルマを相棒にした、高知らしい自由な生き方!
高知で軽トラに乗ってみたら、知らなかったワクワクや、新しい暮らし方に出会えるかも!?



高知では見ない日はない!
軽トラは最先端の乗り物!?

田舎らしい風景のシンボルでもある「軽トラ」とは、コンパクトで小回りが利く軽自動車の規格に、十分な荷物を積める荷台が付いた便利なトラックのこと。高知県でも、中山間地域へ行くほど、狭い農道や山道が多いこともあって、たくさんさんの軽トラが走っている。農作業などの仕事だけでなく、草刈りや荷物運びといった地域の共同作業でも活躍し、壊れにくくて維持費も比較的安い。そんな軽トラは「まさに『家に一台!』」なかつたら生活できんでき」と言われるほど、高知の暮らしに深く根づいている。

さらに今、軽トラはライフスタイルの価値観の変化とともに、あらためて注目を集めている。気軽に乗れて、なんでも積める便利さからアウトドアに使ったり、移動カフェにしたり、自分好みにカスタムしたり。そんなユーザーの変化もあってか、軽トラの二大メーカーであるダイハツとスズキの担当者も「近年の軽トラは業務用だけでなく、快適性を高める車づくりへと変わってきているんです」と口をそろえる。軽トラを当たり前のように自由自在に使ってきた高知に暮らす人々に注目してみると、これからの時代の高知が見えてくるかもしれない。



高知でよう見る!

その

軽トラ あるある



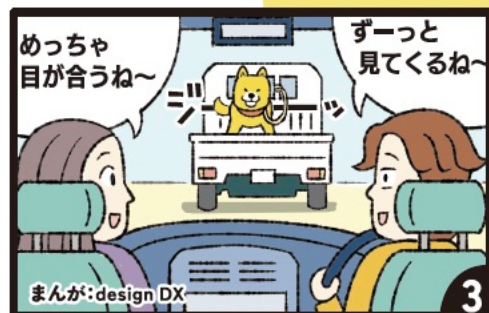
のんびり進む車列、その先には...

道路でゆるやかな渋滞。その先頭にいるのは、だいたい軽トラ。けれど、そこに不思議と焦りは無く「まあ、そのうちどっかで曲がるだろう」とのんびり待つのが高知流。



軽トラに乗ったままトーク

「やりゆうかよ」そんな挨拶から始まり、軽トラに乗ったまま世間話をするのが高知流。時には軽トラに乗った者同士が、乗ったまま窓越しに会話しているなんてことも。



軽トラワンコ=雑種率高し!

軽トラワンコの多くが雑種犬。なぜかはわからないけど、この組み合わせが一番しっくりくる。ちなみに、犬等のペットは積載物とみなされ、荷台に載せることに問題なし。落下しないように必ず安全を確保すること。

保有率は全国第5位!

全国の軽トラ保有台数は約451万台。そのうち約5万5000台を高知県民が保有しており、人口比で見ると、高知県の軽トラ保有率は全国第5位になっている。

※ 令和8年4月時点 ダイハツ調べ

海外市場でも注目!

日本で生まれた軽トラは近年、アフリカや東南アジアを中心に世界からも注目を集めている。「小さくてもパワフル」「シンプルで壊れにくい」といった点が、その理由なのだそう。

へえ〜! 軽トラ事情!

小型コンテナが54個も載る!

軽トラの荷台は、一般的な規格の農業用コンテナがきれいに収まるサイズ。例えば、ゆずの収穫時期には、小型コンテナなら54個も積むことができ、高知では柑橘類の収穫シーズンにも大活躍している。



「89」の軽トラが走る、やっくん印のラッキョウ畑

写真は、土佐清水市大岐のラッキョウ畑で収穫作業に励む「ファームヤマモト」の皆さん。早朝5時から始まる収穫では、掘り起こしたラッキョウを次々と軽トラの荷台へ積み込み、チーム一丸となって運び出していく。ちなみに、軽トラのナンバーは、代表・山本泰司(やまもとやすし)さんの愛称「やっくん」にちなんで、すべて「89」で統一。畑を走る「89」の軽トラは、ファームヤマモトのちょっとしたトレードマークになっている。

軽トラに「好き」を積み込むと

人生が変わった！

軽トラで
キャンプ

軽
トラ
やったら



軽トラ幌キャンパー

おおさき よういち

大崎 陽一さん&愛犬 ラテちゃん



大崎さんの相棒データ

【メーカー/車種】SUBARU/サンバート

ラック 【使用歴】約5年 【走行距離】約160,000km 【お気に入り

ポイント】「移動型の秘密基地」として使えるところ



荷台には、「ハードカーゴ」社製のフレーム「ワークキャリア」を装着。そこにつけている幌は大崎さんがプロデュースしたオリジナル商品。



照明や音響、薪ストーブまで備えた荷台には、アウトドア用品もずらり。テントやタープを張らなくても、すぐに自分だけのキャンプサイトを用意できる。

長年サラリーマンとして働いてきた大崎さん。およそ5年前、知人から勧められた軽トラを購入し、もともとクルマとアウトドアが好きだったこともあり、荷台にキャリア（フレーム）や幌（ほろ）を取り付けるなど、自分なりの改造を重ねていったそう。そうしてたどり着いたのが「軽トラでキャンプを楽しむ」という独自のスタイル。居心地よく整えた荷台で薪ストーブを楽しむ様子をSNSに投稿すると、大きな反響を呼び、今ではイベント出演やテレビ取材の依頼が全国から届く「軽トラ幌キャンパー」の第一人者に。「好きなことを突き詰めていたら、人生が変わりました」と笑う大崎さん。「いつか生まれ育った越前町で、仲間とアウトドアイベントを開きたい」と語ってくれた。

軽トラで お店

夫婦で作った

とっても便利な軽トラカフェ

軽トラに乗り込んだら、人生まで変わった!? キャンプにカフェ、サウナなど、高知らしい自由な発想が、軽トラ1台ですらに広がっている。

何でも
やれる!



タナカフェ

レオナルド ヴェラオルティズさん 田中 智子さん

田中さんの相棒データ 【メーカー/車種】スズキ/キャリイ
【使用歴】約5年 【走行距離】約130,000km 【お気に入りポイント】汚れても洗えるし、荷物がたくさん載るところ!



出店後はボックスを閉じてコンパクトに。普段は通常の軽トラとして使えるため、店舗改装の際には資材運搬でも大活躍だったという。



荷台のボックスを開けば、軽トラカフェに早変わり!開いたボックスは屋台の屋根にもなるため、天気を気にせず出店できるのもポイント。

「軽トラカフェ」として県内各地で出店している「タナカフェ」。現在は香南市に実店舗を構えているが、イベント出店では今も軽トラでの営業を続けている。結婚を機に「夫婦でカフェを始めよう」と考えた当時は、ちょうどコロナ禍。そこで、店舗を持たずに営業できる移動式カフェを開くことに。キッチンカーも検討したが、夫のレオさんが本山町の知人から譲り受けた軽トラを活用し「軽トラカフェにしよつ」と発案。驚くのは、軽トラとして普段使いもできるよう、荷台に載せたカフェ屋台が取り外し可能になっていること。レオさん自ら設計や溶接を行い、夫婦で使いやすい形に仕上げたという。「軽トラは、仕事でもプライベートでも活躍してくれる最高の相棒ですね!」。

軽トラ
やったら
何でも
やれる!

軽トラ×DIYサウナ

大自然でととのう



軽トラサウナ

みやざき せい

宮崎 聖さん

宮崎さんの相棒データ



【メーカー/車種】ホンダ/アクティ 【使用歴】約10年 【走行距離】180,000km 【お気に入りポイント】馬力のあるデフロック(※)の4WD仕様

※左右のタイヤを同じ速度で回転させる機能



「軽トラは田舎のフェラーリですよ」と笑う宮崎さん。普通車では走りにくい川辺や山道でも、軽くてパワーのある軽トラなら軽快に走れるという。



サウナの中には、ロウリュ(※)も楽しめる薪式ストーブを設置。大人2~3人が入れる広さがあり、雨の日には洗濯物を干す場所としても活躍しているという。

※サウナストーンに水をかけて蒸気が発生させ、体感温度や発汗を高める入浴法

軽トラでサウナ

四万十川が流れるのどかな風景の中を走るのは、四角い木箱を載せた軽トラ。実はこれ、移動式のサウナの浴室。軽トラの持ち主で、木材業やカーヌーインストラクターをしている宮崎さんが「川でも山でも、好きな場所でサウナに入れたら」と思い、本業で培った木工技術を生かして製作したという。どこへでも走って行ける軽トラに心地よいサウナを組み合わせたところ、これが大成功。趣味の延長として、自然の中で気ままにサウナを堪能している。お気に入りの場所は、四万十川を目の前に望む河原。「芯まで温まった後は、天然の水風呂へ！それが一番ととのうんですよ」。豊かな自然を全身で遊び尽くす、自由なライフスタイルがそこに垣間見えた。

新しい軽トラで走り出した時

「人生が変わるな」と感じた



「いつかは会社を離れる時が来るのなら、身体が動くうちに新しい挑戦を始めたい」と考え、梶原町との縁をきっかけに、新しい生活に踏み出した。そんな竹内さんにとつて、軽トラは人生の転機を象徴する存在。以前は電気自動車に乗り「高知EV近未来」という連載まで執筆していたが、新しい生活に選んだのは黒いダイハツハイゼット。「納車された時、自分の人生が変わっていく感覚があったね」。



「『ボツンと一軒家』の取材が来たらどうしよう」と笑いながら暮らしている、梶原町の山あいの家屋。「ここに来るなら、やっぱり軽トラやない」と。

暮らし方の最前線を追う！

EVから軽トラに乗り換えた！

長年、新聞記者として地域の暮らしの最前線を見てきた竹内さん。現在は軽トラに乗って、新しいライフスタイルを実践している。



「高知の森林には、大規模林業だけでなく、小規模な林業も必要では」という思いのもと竹内さんは、地域での新たな生き方にもつながる、自分のベースでできる「小さな林業」を実践している。

地域課題にも向き合っていく

新しいライフスタイルの実践

現在、竹内さんは梶原町と高知市の二拠点生活を送りながら、林業とライティング・編集など、複数の仕事を並行している。午前中はデスクワーク、午後からは山へ向かい、自らチェーンソーを握って木を伐(き)る。「午後の林業」と名付けたその時間は、単なる作業ではなく、自然の中で汗を流し、温泉につ

かって一日を終えるという、充実した時間につながっている。都市部のように仕事と暮らしが分離していない、本来の人間らしい「森の生活」。そんな日々には欠かせないのが軽トラだ。林業に欠かせない道具を積み、山あいの道を走る。山々の荒廃が地域課題となる今、竹内さんは軽トラに乗って、次の時代のライフスタイルを実践している。



自ら伐り出した木材もエネルギーにした軽トラEVに乗ってみたい！

たけうちはじめ

合同会社ソー

竹内 一さん

昭和43年、高知市生まれ。高知新聞社で学芸部、須崎支局長などを経て、独立。小規模林業や森の未来を考える「NPO84プロジェクト」にも関わっている。



本の貸し借りをきっかけに、気軽に相談してもらえる、身近な存在でありたいです。

このちかこ

四万十町立図書館 河野 知歌子さん

約500冊もの本を積み込み、町内を巡回している「四万十町立図書館」の移動図書館車。山間部など、大型車では行きにくい地域にも本を届けられるように、軽トラが使われている。次の巡回日までゆっくり本を借りられるのもうれしい。訪れた先で会話が弾み、時にはスマホの使い方相談に応じることもあるそう。



地域に本と交流を届ける 軽トラ図書館



M・Iとよさこいに共通するのは「自由」。興味のある方は、ぜひ一緒に参加してほしい！

おおき ひろゆき

M・I project 前代表

大木 裕之さん

平成12年に結成されたアート集団「M・I project」。よさこい祭りにも出場しており「枠にとらわれない地方車を作りたい」という思いと利便性の高さから、令和元年以降、地方車に軽トラを採用している。昨年は、約30メートルもの化学繊維生地を使ったダイナミックなデザインの地方車で踊りの会場を駆け抜けた。毎年、本番前日まで制作に励んでいる。

高知のさまざまな場所で見かける、軽快に走っていく軽トラ。思わず「おっ！」と目を引かれる、個性豊かな高知の軽トラを集めてみました。

軽

ト

鑑

まだまだある！
なんでもやれる！



心と体を温める 軽トラ移動入浴車



お風呂は心の洗濯。災害時こそ駆けつけて、安心して一息つける時間を届けたいです。

おがわ ひろし

土佐レジン

小川 宏さん

南海トラフ地震への備えとして開発された移動入浴車両「バスくん」。250Lの水を積み込み、1日でおよそ25人もの入浴支援ができる。被災地でも、軽トラならではの小回りと4WDの走破性を生かして走行可能。大きな仮設風呂では難しい、プライバシーにも配慮できる。被災者の心と体を癒す「走るお風呂」だ。

コンパクトでも目立つちゅう！ 軽トラ地方車(※)



まつおか みえ

事務局

松岡 美江さん



はまだ こうぼう

事務局

濱田 公望さん



※よさこい祭りで音楽を流しながら踊り子を先導する車両

オレンジ色やモスグリーンみたいな、カラフルな軽トラが最近増えたと思います。お洒落な車になってきていますね。(高知県・40代) 声届きゅう！



マイドイン KOCHI! 軽トラキャンピングカー

「アイビーログ工房」が手がける「キコリン」は、単体では小屋として、軽トラの荷台に載せればキャンパーに! 軽トラキャンピングカーとして、さまざまな場所へ軽快に出かけられることはもちろん、高知県産スギを100%使用した、ぬくもりあふれる室内空間が旅の疲れを優しく癒やしてくれる。

移動販売車や災害時シェルターにもなれる「キコリン」で、いろいろなことを楽しませんか?

おかはら たくひこ ゆ き じ

アイビーログ工房 岡原 拓彦さん 由紀路さん

学問の神様、菅原道真(すがわらのみちざね)を祀る、いの町の「池ノ内天満宮」。地域の担ぎ手不足を背景に、お神輿(みこし)の新たな担ぎ手に抜擢されたのは、なんと軽トラ! 約100kgのお神輿が畳を敷いた荷台にぴったりと収まり、太鼓の音とともに町内をゆっくり巡る。そんな光景が、新しい秋の風物詩になっている。

まだまだ手探りですが、住民の心の拠り所である神社を残していきたい。若者大募集中!

いけうえ じん

池ノ内天満宮 神社総代 池上 仁さん

池ノ内天満宮 神社総代

みやざき しょうじ

宮崎 晶司さん

新鮮な乳製品を届ける 地乳軽トラ



地乳軽トラを通して、佐川の牛乳とまちのにぎわいを今後も盛り上げていきたいです!

よしもと つよし

吉本乳業 吉本 剛さん

大正5(1916)年創業。佐川町で搾られた生乳を使っている「吉本乳業」では、通称「地乳軽トラ」が活躍中。かわいらしいイラストが描かれた保冷庫を載せ、牛乳やコーヒー牛乳を町内や周辺地域へ届けている。地域で親しまれ、まちのにぎわいづくりに一役買っている。



祭りの存続に救世主!
お神輿軽トラ

軽トラをつなぐ場所

廃車寸前の車両にも
新たな命を吹き込む
軽トラ愛!

四万十町の「Auto Garage MARU」は、買取から修理、カスタム、販売まで手がける軽トラ専門店。代表の丸山さんにとって、軽トラは幼い頃から身近に寄り添ってきたもの。「人生一度きり。好きなことを仕事にしたい」と、およそ3年前に開業した。廃車寸前の車両でも迷わず引き取り、部品がなければ一から作り直すことも。その熱意はSNSを通じて広がり、遠方からも軽トラファンが訪れるという。「泥くさいイメージのその先に、仕事も遊びも自由自在な軽トラの魅力がある。若い世代にこそ気づいてほしいです。」

Auto Garage MARU

まるやま ひろたか
丸山 大貴さん



山で、畑で、地域で、
かかせない1台！

軽トラ やったら



北沢さんの相棒データ

【メーカー/車種】ダイハツ/ハイゼットトラック 【使用歴】約2年 【走行距離】約15,000km
【お気に入りポイント】未舗装の山道も元気にぐんぐん走るところ



思いを込めた炭づくりの仕事を
いつも支えてくれる相棒



菊炭という伝統的な文化が
身近にあることをまずは知っ
てもらいたいです。

きたざわ

ハレ炭店

北沢 はるかさん

「軽トラがないと、この仕事は成り立たないですね」と笑うのは、炭職人の北沢さん。前職である木炭の研究に携わる中で「自分の手で炭を焼いてみたい」という思いが強く、令和7年に独立。現在は、炭窯がある物部川沿いの香美市宮ノ口地区を拠点に「菊炭」という、主に茶道で使われる特別な炭づくりに取り組んでいる。独立と同時に迎えた軽トラは、今や仕事に欠かせない相棒。菊炭の原料となるクヌギを伐採するため山へ入る時も、それを積んで窯まで運ぶ時も、焼き上げた炭を届ける時も、日曜市へ販売に向かう時も、乗り込むのはいつも軽トラ。北沢さんは「菊炭づくりを将来に受け継がれる文化として残したい」と、クヌギの植林にも取り組み、体験型のイベントも開催している。そんな新たな挑戦にも、軽トラが力を貸してくれている。



煙の色や量、窯内の温度変化を細かく見極めながら焼き上げる菊炭は、その名の通り、菊のような見た目が美しい。



県外出身の私にはミッションの運転ができず…。
農家に嫁いだのでいつかは免許をとりにいきたいです！（高知県・30代）

声届きゅう！

生産しているキャベツ畑は、農閑期になると、黄色い扉がフォトスポットとして人気のヒマワリ畑に。今年も7月には、約7万本のヒマワリが咲く予定だ。



子どもたちに農業という仕事を選んでもらえるよう、挑戦していきます！

おおみね ゆうせい

シーズンファーム
Seedsn farm

大峯 悠聖さん



「子どもたちの憧れの職業になってくれたら」。そう話す大峯さんの軽トラは、誰もが思わず「カッコいいと感じてしまう『働くクルマ』だ。

幼い頃から憧れていた農業の道へ進んだ大峯さんは、現在29歳。愛車はもちろん軽トラだ。およそ5年前、独立就農した際に新車で購入し「せっかく乗るならオシャレにしたかった」と、自分好みにカスタム。仕事でついたりいろいろな傷も、大峯さんにとっては勲章のようなもの。農作業だけでなく、プライベートでも愛用しているという。行く先々で、初めて会う人から声をかけられることも多く「軽トラは無理なく人とつながれるコミュニケーションツール」にもなっているそう。収穫した野菜を荷台に並べ、即席の販売所として活用したこともあった。「農業が子どもたちの憧れの職業になってくれたら」。そう話す大峯さんの軽トラは、誰もが思わず「カッコいいと感じてしまう『働くクルマ』だ。

この1台が誰かと農業をつなげるきっかけになる

仕事もはかどる！

生産現場で大活躍する軽トラ。高知をタフに走り回るその1台は未来の生産業を担う人たちの仕事を支える相棒になっている。



大峯さんの相棒データ

【メーカー/車種】スズキ/キャリイ 【使用歴】約5年 【走行距離】約60,000km
【お気に入りポイント】高知ではあまり見かけない、こだわりのデザイン！



商品を積んだ軽トラを中心に、
世話焼きであたたかい、高知ら
しい井戸端の風景が広がる。



人も集まる!

地域を軽やかに走っている軽トラだからこそ、
その周りには自然と人が集まり、あたたかな交流が生まれる。

「道の駅よって西土佐」の売り場で存在感を放っているのは、その場に駐車しているかのような軽トラ! 荷台には旬の野菜や果物が並び、フロントガラスには地元生産者たちの顔写真がずらり。西土佐の日常が感じられるように演出されている。「西土佐の暮らしを象徴するのは、四万十川に沈下橋、そして軽トラ。それらを『そのまま道の駅に取り入れよう!』と、みんなで決めたんです」と話すのは駅長の林さん。こうして、道の駅のスタッフをはじめ、地元住民や生産者、デザイナーも「一緒になって作り上げた軽トラがある売り場空間は、まるで地域の日常を映し出す『展示会』のような場所に。観光客はもちろん、地元住民も日常的に訪れては自然と会話が弾み、あたたかな交流が生まれる。軽トラを中心に、地域を感じられる空間が広がっている。

空間演出に軽トラ!

地元を感じる場に



野菜を載せて沈下橋を渡る
軽トラは西土佐の風景。「軽トラTシャツ」も人気ですよ!

店長
かわい はな
川井 花さん

道の駅よって西土佐 駅長
はやし たいすけ
林 大介さん

軽トラで移動販売!

人と人をつなぐ一台

「いつもの販売場所に向かうと、地域のお客様が先に来て待っていてくれるんですよ」。そう話すのは、高知県の地元スーパー「サンブラザ」が展開する、軽トラを使った移動販売車「ハッピーライナーmini」のキャプテン、矢野さん。出発前にお惣菜や菓子パン、日用品など、毎日の暮らしに欠かせない商品を積み込みながら「買い物に困っている地域の人たちの力になりたいくて、サンブラザに転職したんです」と爽やかに笑う。狭い路地も軽トラらしい小回りで軽快に進み、販売場所に着いたら荷台の売り場をテキパキと展開。その頃には何人ものお客さんが軽トラを囲んでいて「暑いねえ」「今日は何かがあるが?」とやりとりが始まっている。事業担当者の森田さんは「販売だけでなく、日々の生活を通じた見守り活動も行っています。家族のように親しく言葉を交わせるお客様に会えることも、やりがいの一つです」と教えてくれた。



お客さんに「今度これ持ってきてや」と声をかけてもらえるのが一番嬉しいです。

やの まさかず

矢野 正和さん(左)

もりた たかし

森田 孝志さん(右)

ハッピーライナーmini キャプテン

株式会社サンブラザ

荷台から広がる、
賑わいの風景

軽トラやったら

荷台に並ぶのは、地元の旬。畑からそのまま届いたような、新鮮な空気感まで伝わってくる。



軽トラやったら
市も開ける！

荷台がそのまま

店になる日！

南国市の「後免(ごめん)町商店街」で開かれている「地産地消ごめんの軽トラ市」はその名の通り、軽トラや軽バンの荷台を売り場にして、地域の農家や商店、さらには高校生までが出店する街路市。商品を積み込んだ軽トラでそのまま会場へ乗り入れて店を開ける手軽さから、準備や片付けの負担も少なく、今では年3回開催される地域の人気イベントとなっている。

「軽トラ市のきっかけのひとつをくれたのは、実はあの『アンパンマン』シリーズの作者・やなせたかし先生なんです」と教えてくれたのは、南国市商工会の副会長を務める徳久さん。後免町で少年時代を過ごしたやなせさんは、町名にちなんで開かれている恒例イベント「ハガキでごめんなさい」の審査員長を務めていたこともあり、当時「これからみなさんの力で後免町を盛り上げ

乗ってきた軽トラの荷台が、そのまま売り場に！
そんな「軽トラ市」が15年以上続く商店街がある。
気軽に出店できるからこそ、地元を盛り上げたい人たちが
思い思いのスタイルで元気に活躍している。

地産地消ごめんの軽トラ市



高知農業高等学校 教員

ほり りょうすけ

堀 量輔さん(右)

卒業生

はなおか あやな

花岡 綺菜さん(左)

高知農業高等学校として軽トラ市に出店し、生姜クッキーや濃縮トマト、栗など、地元の食材を使った商品を販売していたお二人。高知農業高等学校では、出店するたびに毎回ほとんどの商品が完売しているそう。「お客さんとの距離も近く、やりがいのあるイベントです！」

南国市商工会 副会長

とくひさ まもる

徳久 衛さん

東京都出身。高校教諭として高知県に赴任し、結婚を機に奥さんの地元である後免町へ移住。軽トラ市はもちろん、やなせたかしさんがデザインした「ごめん生姜地蔵」や「ハガキでごめんなさい」など、地域を盛り上げる企画に携わる。





高知でよう見る!

その

軽トラ あるある



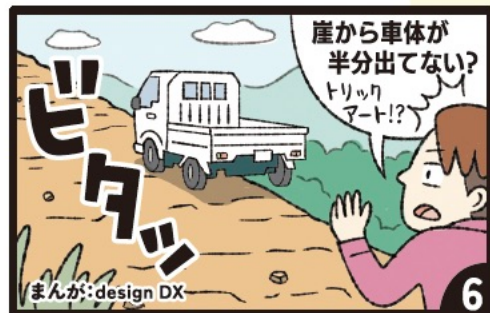
代車ももちろん軽トラ

「軽トラを下駄のように使う」と昔から言われてきた高知では、修理で預けた軽トラの代車が軽トラ、ということもよくある。それほど日常に欠かせない一台なのだ。



「日曜市」は軽トラ天国!

日曜日の早朝。高知市追手筋に次々とやって来る軽トラ。荷台には TENT や商品がぎっしり。サッと準備を済ませて、すっとのく(※)のがお約束。
※すぐに離れる



そんな場所にも停めるが!?

日本一の森林率を誇る高知では、山の仕事でも軽トラが欠かせない。崖っぶちやものすごい斜面など、一見ハラハラするような場所に軽トラが停まっていることも少なくない。

地産地消ごめんの軽トラ市~開催情報~

- 開催場所/後免町商店街
- 開催時期/開催情報は南国市商工会のHPをチェック
- 出店数/12台ほど

1/軽トラの荷台には「地元を盛り上げよう!」という思いが並んでいる。2/「やなせたかしロード」という愛称もある商店街。やなせたかしさんが生み出したキャラクターたちの石像も。3/荷台に座っておもてなしをする高知農業高等学校の生徒たち。4/「高見のたこ焼き」は、現在は軽トラキッチンカーで出店。5/軽トラ市は「ゴメンジャー」のホーム。子ども達から大人気。



ご当地ヒーロー

ごめん戦隊 ゴメンジャーNEXTさん

平成21年に初めて軽トラ市へ参加して以来、出演依頼が相次ぎ、瞬間に南国市の人気者に。軽トラ市では、やなせたかしロードを舞台に、まちを寂(さび)れさせようとする「シャッター怪人サビレラー」からイベントを守るため、戦い続けている。



高見のたこ焼き

はまだ たかひろ 濱田 喬廣さん

第1回目の軽トラ市から出店している。現在は軽トラキッチンカーだが、令和5年頃までは軽トラの荷台に業務用たこ焼き器を載せて出店していた。「軽トラだと準備も片付けも楽なので、毎回気軽に参加できるんですよ!」





「漁や仲間のことが以前とはまた違う視点で見えてきた」と話す長戸さん。次世代の船長として周囲の期待も大きい。

網の手入れやワイヤーの引き方など知識と経験を要する定置網漁。先代船長から学んだ伝統技術を未来の漁に生かす。

未経験から船長へ 海に挑むサラリーマン漁師

高齢化によってベテラン漁師の引退が相次ぐ高知県の漁業。そんな中、黒潮町では移住した1人の漁師が若い世代を率いながら伝統の定置網漁を支えている。漁を指揮するのは、兵庫県出身の長戸さん。釣り好きが高じて漁師を志し、14年前、関西の就業フェアで「サラリーマン漁師」という働き方を掲げる水

野さんと出会い、黒潮町への移住を決めた。当時はまだ子どもも幼く、会社員として安定収入を得ながら、家族との時間も大切にできる環境に魅力を感じたという。

一方で、漁師としての経験はほとんどゼロ。しかし、その成長を支えたのが、手厚い技術継承の仕組みだった。ベテラン漁師の減少に危機感を抱いていた水野さんは、土佐清水市から熟練漁師を招き、長戸さんら若手の育成に力を注いだ。「自分たちが漁を続けられる環境を常に整えてくれていた」と長戸さんは振り返る。現在は船長として若手をまとめる立場となり「若い世代が漁師を続けていける環境をつくりたい」と、水野さんと同じ思いを胸に、地域漁業の未来へ力強く舵(かじ)を切っている。

いおどり
株式会社魚彩 船長

ながと りゅういち
長戸 龍一さん

昭和63年、兵庫県生まれ。漁業就業者フェアの中で、黒潮町のサラリーマン漁師に惹かれ、高知県へ移住。ベテラン漁師のもとで技術を継承し、若くして船長に就任。



今回の関係

軽トラを乗りこなす愛媛の柑橘農家さんは、みかん山の急な坂道を、バックでガンガン登っていく。収穫した柑橘を入れたキャリを載せ、そのまま下っていきけるように、バック坂登りが上手い。(愛媛県・30代)

声届きゅう!



いおどり
株式会社魚彩 代表取締役

みずの だいすけ
水野 大輔さん

昭和51年、黒潮町生まれ。家業の仲介業から、漁師の仕事を事業継承。平成28年にサラリーマン漁師に着目した株式会社魚彩を立ち上げ、一次産業の若返りを図る。



水野さんは「漁業を通して日本の食を地方の底力で支える。そのやりがいと責任を次世代に伝えたい」と、強い思いを語る。

伝統漁のバトンを 次世代へとつなぐ仕掛け人

黒潮町で水産業を営む家系に生まれ、21歳から仲買人として地元漁業に携わってきた水野さん。しかし、高齢化による後継者不足は年々深刻さを増し、親交のあったベテラン漁師からの切実な頼みを受け、定置網漁の事業を引き継ぐことになった。そこで、県内でも先駆的に「サラリーマン漁師」という働き方を導入。未経験者で

も安心して挑戦できるよう、会社として労働環境や育成体制を整え「漁業の若返り」に挑んできた。中でも、水野さんが大きな期待を寄せていたのが、創業当初から共に歩んできた長戸さんの存在だった。チームで動く定置網漁において、船長は欠かせない要の役割。ベテラン船長の引退という大きな転機もあつたが、現場と丁寧話し

合いを重ねながら体制を整え、3年前に長戸さんが船長へ就任した。「次世代へつながる確かな一歩になった」と水野さんは振り返る。現場を担う長戸さんと、裏方として組織を支える水野さん。2人を中心とした新体制で、二次産業の若返りへ力強く歩みを進めている。

作る人、伝える人、つなぐ人、遺す人…
ここ高知で、そんな仕事や活動をしている人と
その人がリスクペクトする人にスポットを当て
2人の関係性、双方の思い、そしてこれからことなど
胸に秘めたる熱い思いをひもといていく

志を同じくする2人。そのバトンには、地域の伝統と水野さんの一次産業に対するリスクペクトや思いも込められている。



声届きゅう!

幼い頃、親の農作業の傍らで軽トラの荷台で絵本を読んだり、うたた寝して待っていた記憶があります。(高知県・50代)

ワカモノがゆく! vol.8

土佐文化体験記

高知県内各地で脈々と継承されてきた地域の文化を、ワカモノたちが体験!
今回は香美市の「やまも工房」で、大学生がよさこい祭りに欠かせない鳴子づくり体験に挑戦した。



チームへの思いを
鳴子へ込めました!



体験者(代表)

くろいわ ひろき

黒岩 裕貴さん

愛媛県出身。今回の体験者が所属する、古民家改修などを行う地域交流サークル「Wavert(ワベール)」の前部長。「高知工科大学よさこい踊り子隊」でも2年間、踊り子として参加。

鳴子の響きに宿るのは
よさこい祭りの精神

よさこい祭りに欠かせない
鳴子を、年間およそ1万
4000組も製作している、
香美市の「やまも工房」。創
業者の公文善次郎(くもんぜ
んじろう)さんは「よさこい鳴
子踊り」の作詞・作曲を手がけ
た音楽家・武政英策(たけまさ
えいさく)さんが顧問を務めた
バンドにも所属していた人物。
平成8年から本格的に鳴子づ
くりを始め、今では県内外のよ
さこいチームはもちろん、海外
からも注文が届く、鳴子づく
りを代表する工房のひとつに。
現在は5人の職人が工房を支
え、素材には軽やかで澄んだ音
色を生み出す「土佐ひのき」を
使用。よさこい祭りらしい多彩
な表現や、チームごとの個性を
踏まえながら「そのチームらし
さ」が伝わる一本を目指して、鳴
子づくりに向き合っている。



香美市土佐山田町

鳴子(なるこ)

高知の夏の風物詩「よさこい祭り」。「鳴子を鳴らして前進すること」とルールにあるほど、鳴子は祭りに欠かせないアイテム。そのルーツは、田畑の鳥を追いかけるために使われていた「すずめ脅し」の道具とも。また、「よさこい鳴子踊り」で知られる音楽家・武政英策さんは、祭りが始まる以前から地域の運動会の応援で使っていた、というエピソードも残る。

問い合わせ先／0887-52-4707
(やまも工房)



1.「やまも工房」の現代表の公文佑典(くもんゆうすけ)さん。25歳で家業へ入った。祭りが止まったコロナ禍には、人とのつながりを再び実感し「よさこいや鳴子づくりが自分の人生に欠かせないと、あらためて気づいた」という。 2.鳴子ギャラリーでは、これまで手がけた鳴子を常時1000種類以上も展示。 3.思い思いのデザインを決めたら、水彩絵の具で塗っていく。 4.完成した自分だけの鳴子を、うれしそうに手に取っていた。



これを持って踊ったら
幸せだろうな〜♪

手元の鳴子に表れる
それぞれの個性
踊りたくなるひと時

今回、鳴子づくり体験に挑戦したのは、高知工科大学の学生たち。参加した4人は全員、東京や広島などの県外出身者で、さらに3人は「高知に来てまだ1カ月くらい!」という、よさこい祭りも未経験の大学1年生。一方で、4年生の黒岩さんは「高知工科大学よさこい踊り子隊」で踊るなど、すっかりよさこいの魅力にハマったそう。ギャラリーに並ぶ色とりどりの鳴子を前に「こんなにカラフルな鳴子があるなんて!」と驚きの声を上げ、チームの鳴子を見つけて喜ぶ。鳴子づくりは、まずバチ選びからスタート。自分で考えたデザインに合わせて絵の具を重ね、塗り終えた後は「ニス」を塗って乾燥。その間は、現代表の母・美佐子さんお手製のゆずジュースも味わいながら、よさこい祭りの話題を聞いたり。そうして完成した鳴子には、よさこいらしい、それぞれの個性がしっかりと表れていた。

高知の薬味の底力

TOSA SPICE WORLD!

vol.8

にんにく

今回は

キラリ、そして「ピリリ」と放つ存在感。高知の食文化に欠かせない、辛くて香り高い「薬味」の数々

歴史、産地、そしてその薬味を使った料理のことをもっと知りたくありませんか？



高知の食文化を代表する「鰹のタタキ」。その美味しさを引き立てる名脇役といえば、なんとと言っても「にんにく」だろう。高知県では16世紀末からにんにくの栽培が行われており、その長い歴史の中で生まれ、今も大切に受け継がれているのが「赤玉にんにく」と「土佐に

土佐の風土が生んだ
辛口にんにく

高知の食文化を代表する「鰹のタタキ」。その美味しさを引き立てる名脇役といえば、なんとと言っても「にんにく」だろう。高知県では16世紀末からにんにくの栽培が行われており、その長い歴史の中で



初夏の収穫期限定で楽しめるフレッシュ感たっぷりの生にんにく。辛みも香りも豊かで、魚・肉料理の薬味に最適！



高知ではヌタの素材で有名な葉にんにく。茎は炒め物に、先端の実の部分はてんぷらにして楽しめる。収穫期は初春。



竹村さんも軽トラユーザー！



話し手

にんにく農家(にここ農園)

たけむら よしたか

竹村 義孝さん

今や稀少になりつつある高知県在来種のにんにくを南国市で栽培。平成25年より「にここ農園」のウェブサイトで公開・販売中。

初鰹のシーズンに

ピタリと重なる収穫期

「にんにく」という2つの在来種だ。最大の特徴は、一般的な品種とは一線を画す、五感を刺激するような強い辛み。この段違いのガツンとした辛みこそが、脂の乗った鰹の風味を邪魔することなく、そのうま味を引き立ててくれる。

高知のにんにくは、一般的な品種に比べて収穫時期が早いのも特徴だ。特に在来種の「赤玉にんにく」は5月初旬に収穫を迎え、ちょうど「初鰹」のシーズンに

びたりと重なる。南国市の生産者・竹村さんは「収穫されたばかりの生にんにくを鰹のタタキに添える。これこそ大昔から伝わる本来の食べ方ですよ！」と笑顔で語る。初夏になると日曜市や良心市に並ぶ新鮮な生にんにく。鰹のうま味を引き立てる歴史ロマンあふれる伝統の食べ方を、ぜひ試してみたいかがだろうか。



声届けよう！

軽トラに積んである物が、何なのか気になり、つい覗きこんでしまいます。

例えば、旬の野菜だとか。(大阪府・40代)

以前は譲ってもらった
軽トラに乗っていたという



実際に手にとってもらい、
直接魅力を伝える対面販売を行う



野生のレザーや毛皮で描く「地域資源」の新しい形

はと は さ
じ さ じ っ
め で ま る
る !

Vol.6



革工房TAIL

まつだ

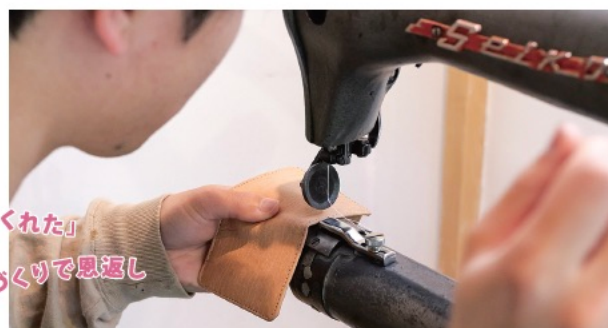
松田ナメロウさん

@tail_namerou

平成9年生まれ、和歌山県出身。
幼い頃からDIYやプラモデル好き
な父の影響を受け、ものづくりに興
味を持つ。令和2年に佐川町の地
域おこし協力隊に就任し、卒業後
「革工房TAIL」を開業した。

「野生ならではの傷も、個性として生かしています」と話すのは、6年前に佐川町へ移住した松田さん。手がけるのは、もちもちとした肌触りのシカ革や、驚くほど柔らかなイノシシ革を使ったジビエレザーだ。「さかわ発明ラボ」で活動する中で、廃棄されるジビエの副産物の存在を知ったことを機に、舞台造形会社で培った経験と最新機材を掛け合わせ、革職人の道へ進んだ。ジビエの皮は個体差が大きく、季節によって油分量も変わるため、鞣（なめ）しには繊細な調整と手仕事が必要だ。大量生産が難しいからこそ、ワークショップなどを通じて、その魅力を伝える活動にも力を注いでいる。「いつか全国で「害獣」と呼ばれる動物たちを、少しでも多く活用できるようにしたい」。松田さんの挑戦は、地域資源に新たな価値を生み出している。

培った経験と手仕事が生み出す
個性を生かしたもののづくり



「食材や軽トラを譲ってくれた」
地域にもものづくりで恩返し



声届きゆう! 山から下りてくる軽トラの荷台にはイノシシやシカがいることがよくある。(高知県・30代)

県史編さん



昭和21年に発生した「昭和南海地震」の様子。高岡郡須崎町（現須崎市）の地震被害。（画像所蔵：高知県）

高知の自然を
伝えていく
自然編がスタート！



高知県史（自治体史）とは？
高知県について伝え残されたさまざまな資料を調査し、本県の歴史を詳細に記したもの。郷土の歴史を知る、大切な手がかりだ。

「高知県史（自然編）」の編さん始動

今年度、原部会長（高知大学理工学部教授）を中心に自然部会が発足した。「高知の自然の魅力と災害の教訓を、県民の共有財産として次世代へしっかりと手渡したい」と原部会長が意気込みと内容を語ってくれた。

自然分野は、山・川・海が近く表情ゆたかな高知の自然を地質や地形、気候、生物、植物などの多様性からひもとく。そして、県民の暮らしを形づくってきた高知の自然の姿を分かりやすい文書で編さんを進めていく。

また、地震や台風、豪雨など、県が経験してきた自然災害の記録と、県民が積み重ねてきた復旧・復興の知恵をたどり、これからの防災・減災に繋がるような県史を目指す。

いま歩みが始まった自然編は分野が多岐にわたる。様々な関係者の方と連携し、令和15年の発刊を目標に着実に歩みを進めていく。



高知の自然と共に生きる生物の多様性もひもといていく。



高知には、珍しい植物はもちろん、それを大切に受け継いできた地域の歴史もある。



表情ゆたかな高知の自然を地質や地形から語っていく。



自然部会 原部会長



4月から県史編さん 活用課になりました！

令和3年度にスタートした高知県史編さん事業は、令和2年度までの20年間にわたって進められています。現在、8分野（古代・中世・近世・近代・現代、考古・民俗・文化財・自然）において部会が設置されており、令和8年度末には、「資料編 近世1」の発刊も予定されています。新しい県史の刊行がいよいよ本格化することに伴い、これまでの「県史編さん室」は令和8年4月から「県史編さん活用課」として新たにスタートしました。

これまで丹念に調査収集してきた資料をもとに、これから順次、県史を発刊するとともに、その成果を県民の皆さんに広く伝え、高知の魅力の再発見や郷土への愛着醸成、さらには観光振興などへの活用にもつなげていきます。

本コーナーでも、県史の魅力を活かしながら、高知の歴史を未来へ伝える新たな活用挑戦していきます。どうぞご期待ください！

第17回 香南市須留田八幡宮

史料が語る ものの語

日本では、7世紀の「大化」以来、ほぼ一貫して時間軸の指標として元号が用いられてきた。本来、改元の権限は天皇に帰するとされるが、高知県内各所には、幕末の一時期、地域独自の元号が流布した痕跡が残されている。



御山所神社（高知市春野町）狛犬台座



鈴が森（仁淀川町）の石灯籠



須留田八幡宮（香南市赤岡町）絵馬

謎の元号「天晴」

香南市赤岡町の須留田（するだ）八幡宮に掲げられている武者絵の絵馬には、その寄進年を示す「天晴元丁卯年」の記載がある。「天晴」とは正史にない元号で、ほかにも県下には西は吾川郡の仁淀川町から東は安芸郡東洋町まで、少なくとも十数か所に「天晴」あるいは「天政」「天星」の元号を記す灯籠や玉垣、手水鉢などが残されている。

それでは「天晴元年」とはいつか。その年は「丁卯」の干支なことから慶応3（1867）年と推測される。実際は翌年、「明治」と改元とされ維新を迎えるのだが、一足早く土佐では、新元号として「天晴」が一人歩きしたようだ。天が晴れると記し、「あつぱれ」とも読めるこの元号には、新時代を渴望する庶民の夢が重なっていたのかも知れない。

高知県の
歴史に触れる

県史特集

地域を支えた

駐在保健婦の精神

今回のテーマは、高知県の「駐在保健婦制度」。
スクーターで集落を巡り、住民の健康を支えた保健婦。
今も地域保健の原点として語り継がれている、
その歩みと受け継がれる精神を訪ねた。



昭和14年、四万十市（旧・幡多郡富山村）生まれ。看護婦を務めた後、昭和38年に駐在保健婦に。スクーター第1期世代。

あきた みちこ
秋田 美智子さん



昭和18年、四万十市（旧・幡多郡西土佐村）生まれ。看護師を経て、昭和43年に駐在保健婦となり、土佐町などで活動。

いわさき まるい
岩崎 丸さん

高知の山あいを走った
地域に寄り添う
駐在保健婦の記憶

軽トラと同じように、小回りが利いて気軽に乗れるスクーター。かつて高知県には、住民の健康を守るために自ら地域に住み込みながら、支給されたスクーターで集落を奔走した保健婦[※]たちがいたことをご存じだろうか。「駐在保健婦制度」と呼ばれたこの取り組みは、山間へき地が多く、交通が不便だった高知県だからこそ発展し、今も地域医療の原点として語り継がれている。今回は、そんな駐在保健婦として活動した秋田さんと岩崎さんに、当時の暮らしや現場での経験を振り返ってもらった。

「スクーターで集落を回っていると、『ちよつとちよつと、保健婦さん！』と声をかけられて、そのまま相談が始まることも、しょっちゅうあった」と岩崎さん。地方の医療体制がまだ十分に整っていなかった、昭和40年代の半ば頃。同じく町や村には、自動車はあっても、単車ですら数台しかなかった時代に、スクーターで地域の全戸を訪問しては、健康指導や病人等の介助にあたっていた保健婦の活動は、住民にとっても最も身近な保健サービスだった。

「遠くほど行かん」と 住民に寄り添った 駐在保健婦の使命感

高知県では昭和23年に駐在保健婦制度が始まり、各地に駐在する保健婦が、結核対策や乳幼児、妊産婦、学童の保健指導にあたっていた。秋田さんは昭和38年に保健婦となり、それからおよそ3年間、高知県東部の馬路・魚梁瀬（やなせ）地域を担当したそう。「まだ魚梁瀬ダムを造り

よる頃でね。覚えちゅうがは、東北から来た建設作業員さんの赤ちゃんが住みゅう、山奥の家に、予防接種を受けようかとか、股関節脱臼をしてないか見るために、道が走れんなつたらスクーターを置いて、1時間でも歩いて行きよつた。『あそこに赤ちゃんがおるき、自分が行かん』って。その使命感は、地区を任せ、地域に駐在していた、保健婦だからこそ。『遠くほど行つてあげん』って思いよつたね」。



最盛期の昭和53年には、180人の駐在保健婦が県下全域で活動していた。

高知に最後まで残った 駐在保健婦制度を支えた 保健婦たち



岩崎さんは土佐町で駐在保健婦として勤務。当時は一人で3000世帯ほどを担当した。

時代ごとに変化する地域の健康課題に応じて、駐在保健婦の役割も広がっていった。寝たきり高齢者がいれば自宅を訪ねて体を拭き、手足を動かす。理学療法士などの専門職が少なかった時代には、リハビリの研修を受け、その役割まで担っていたという。「保健婦は何でもやりよつたね」と岩崎さん。



当時、無医地区の保健衛生向上対策のため、へき地保健衛生相談所も設置されていた。（昭和44年、梶原町松原）

その後、専門職の増加とともに役割は分かれていったが、エイズやO157など新たな健康課題が生まれるたび、保健婦は地域から求められ続けてきた。昭和58年以降、市町村が健康管理の主体となり、県による駐在保健婦制度も時代とともに役割が変化していった。その中でもこの制度が最後まで残ったのは高知県だった。へき地が多いからこそ行く」という保健婦たちの精神もそれを支えたひとつであった。



駐在保健婦のトレードマークだった黒いかばんには、赤ちゃんの体重計や巻き尺、体温計、血圧計などが入っていた。当時の活動を振り返る手記や記録も数多く残されている。

AM3:00

—— タテクリカエシ ——

80%



まっすぐにしか進めない!?
猪突猛进な
手杵(てぎね)妖怪!

「タテクリカエシ」は、黒潮町下田の口(しもたのくち)に伝わる妖怪で、手杵(※1)のような姿をし、目鼻や手足はない。人が夜道を歩いていると、前方から「スットン、スットン」と音を立てて転がって来て、出会い頭に人を転ばせるという。日本各地に見られる「コロバン」系の妖怪の一種で、急な方向転換はできず、脇へそれると避けられるともいわれる。県内では他に、宿毛(すくも)市橋上町で、雪の山道で二本足の足跡を残すとされる「手杵返し」や、四万十町(旧十川村)で、夜の川原で錫杖(しゃくじょう※2)の音をさせながらとんぼ返りをしている「手杵棒(てぎねぼう)」などが伝わる。いずれも、手杵にまつわる伝承圏の怪異として知られている。後年には新潟の妖怪として紹介された例もあるが『幡多妖怪地図』では、高知に伝わる妖怪として紹介されている。

(※1) 中央のくびれた部分を手で握って、まっすぐにつくように作られたきね (※2) 僧侶や修験者が修行や巡礼の際に携帯する、金属の輪がついた杖のこと
参考文献: 民間伝承 第四巻一号～第七巻六号 第二巻(民間伝承の会/編) 日本怪異妖怪辞典 四国(毛利恵太/著)
怪異の民俗学2 妖怪 土佐の山村の「妖物と怪異」(桂井和雄/著 小松和彦/責任編集) 幡多妖怪地図(四万十漫画倶楽部/著)
日本の妖怪百科3 里の妖怪(岩井宏寛/著)

贈り物

とさぶしからの

店…当選ハガキを持って提供店へ

郵便または宅配便にて自宅へお届け

P20 にここ農園

乾燥土佐にんにく(2球) 5名様

ソフトな歯触りと食べるほどに増す辛さがたまらない土佐在来種。様々な料理で使え、長期保存もできる乾燥タイプ!



応募締切

令和8年9月20日

クイズとアンケートに答えて読者プレゼントに応募しよう!

クイズ 「地産地消ごめんの軽トラ市」が開催されている市町村の名前は?

- ①スマホから右のQRコードを読み込んでwebサイトにアクセス
- ②応募フォームより必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※読者プレゼントの応募は「とさぶしwebサイト」もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合は①年代②性別③お住まいの都道府県④とさぶしを手に入れた場所⑤とさぶしを知ったきっかけ⑥良かったコーナー(複数回答可)⑦満足度(10段階評価でお願いします)⑧とさぶしを読んで実際に行ってみたい、食べてみたいなど意識変化はありましたか?(はい/いいえ)⑨「はい」の方。その理由を教えてください⑩とさぶしを読んで、実際に冊子掲載店や場所に行ってみたり、商品を購入してみたりしましたか?(はい/いいえ)⑪クイズの答え⑫希望する商品⑬氏名⑭発送先のご住所⑮電話番号⑯メールアドレス(※デジタルギフトご希望の場合)⑰「声とききゅう!」(※)をご記入の上、下記の宛先まで締切日(令和8年9月20日)必着でお送りください。〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち

●読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。●プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。●いただきました個人情報はプレゼントの発送にのみ使用します。※とさぶし第48号より、各ページ下に読者のみなさんから届いた声の掲載を始めました(今回応募していただいたコラムは第56号に掲載予定です)。とさぶしに関する「感想」や、次回の特集テーマである「アート」「祭り」にまつわるエピソードなど(30文字程度)をお寄せください。掲載は抽選となります。(例)高知の街中や何気ない場所にあるアートを発掘したい!(高知県・30代)

P05

タナカフェ 店

パウンドケーキとサブレの
セット引換券 3名様

香南市香我美町に店舗を構える「タナカフェ」から、人気の焼き菓子セットをプレゼント。イベント出店時にも利用可能。



P10 ハレ炭店

菊炭(大小セット)

3名様

主に茶道用に使われる「菊炭」。美しい断面で消臭調湿効果もあり、アロマディフューザーとしても使える優れもの!



P12 道の駅よって西土佐
よって西土佐Tシャツ
(Lサイズ) 3名様

「道の駅よって西土佐」のシンボル「軽トラ」が描かれた、ユニークなオリジナルTシャツ。白と紺の2枚組みでプレゼント♪



QUOカードPay
1000円分 5名様

※こちらの商品をご希望の方は、応募時にスマホで受信できるメールアドレスを記載してください。

※QRコードが読み込めない場合はLINEアプリから友だち登録していただき、ご応募ください。

とさぶし





A BRAND NEW CHAPTER BEGINS
TOSABUSHI

とさぶし

<https://tosabushi.com>

web
見てちゃ!

発行
高知県文化生活部文化振興課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号(本庁舎5階)
Tel 088-823-9793 Fax 088-823-9296
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp
発行日: 令和 8 年 6 月 30 日(季刊)

企画 とさぶし編集委員会
制作 ほっとこうち

バックナンバーの入手方法・お問い合わせ

高知県文化生活部文化振興課(上記)まで
ご連絡ください。

Facebook、LINE、Instagramでも情報配信中!



Facebook



LINE



Instagram

特集

高知ならやっぱり!

軽トラやないと!

P02

P04

P07

P08

P10

P12

P14

軽トラやったら何でもやれる!

EVから軽トラに乗り換えた!

軽トラ図鑑

軽トラやったら仕事もはかどる!

軽トラやったら人も集まる!

軽トラやったら市も開ける!

連載

P16

P18

P20

P21

P22

P24

P26

P27

憧れのバトン【船長×社長】

土佐文化体験記【鳴子(なるこ)】

高知の薬味の底力【にんにく】

さっとはじまる とさではじめる!【革工房TAIL】

つないでつむいで 県史編さん

県史特集【地域を支えた駐在保健婦の精神】

バケベディア【タテクリカエシ】

とさぶしからの贈り物